

# 「上昇」と「下降」を主題とする詩作の試み

高野吾朗

## 転倒

次の階段を降りようとして あなたはあえなく転ぶ  
躓き 落下していくあなたの前に 大木が登場する  
暴風雨に耐えつつ凛々しく直立する木 楠だろうか

この階段に出会う以前のあなたは 恐怖の中にいた  
どこにいてもそこにある物をなぜか壊したくなった  
抑え込んできたその衝動がついに爆発寸前に達した

突然の転倒に怯え あなたは必死に木へ手を伸ばす  
老木ながら満開の美しさ しかも根の醜さが際立つ  
乾いた明るさと死の匂いの何たる対照 桜だろうか

転倒前のあなたの眼は 全てをあべこべに見ていた  
ドアは牢に見え 窓は壁に見え 地図は霧に見えた  
転倒現場の階段は美術館の入口のごとく見えていた

いや 桜ではなく 檜なのでは あなたは思い直す  
品格と生気に溢れるその佇まいに 嫉妬すら覚える  
古代から続く全世代の檜を内蔵しているのでないか

落下し終えたあなたを待っているのは一人の天使だ  
残念ながら 白衣ではなく黒衣で しかも案内役だ  
「絶縁美術館へようこそ」 声も表情も 事務的だ

待て 本当に檜か 落下しながらあなたは黙考する  
轟音の中 灰まみれと化した木に激流が襲いかかる  
倒れずにいるあの忍耐が哀しくも美しいのはなぜか

時計 靴 鏡 美術館の中は絶縁の証拠品ばかりだ  
「あなたの転落の真の理由 それはとある匂いだ」  
そう言って天使があなたを連れゆくのは 館の奥だ

落下の最中 あなたは安易な感動より怪しさを好む  
不思議な履歴の木が倒れゆく姿に ただ打ち震える  
指輪を取り出すあなた まさか倒木に求婚する気か

「同じ日常を繰り返してばかりの人生は無価値だ」  
「どんな矛盾もきれいに整理できてこそ成功者だ」  
転倒前のあなたの信念だ 死の前ではどちらも嘘だ

「君を不幸から救い出す 今からそれを証明する」  
恭しく跪き 求婚を終えると あなたは指輪を隠す  
次に取り出すのは斧だ 死んだ木をさらに殺す気か

美術館の奥の部屋に安置されているのはガラス瓶だ

平凡なその瓶こそ 「絶縁」の究極例なのだそうだ  
「なぜこれが秘宝か」というと 天使は薄笑いだ

楠も桜も檜も 生きている間は無価値なだけである  
死んで木材になってこそ 初めて価値ある生となる  
永遠の愛を誓ったあなたが斧を振るう理由はそれか

転倒直前まであなたが夢見ていたのは 世界平和だ  
罪悪感と劣等感を払拭する最善策 それは人助けだ  
平和だと誰も救えない あなたが選んだのは放火だ

斧でできた刻み目に手を入れると 人の温みがする  
深き傷跡を秘めて歪む年輪 売れない材かもしれぬ  
「私も自分を使い切って死にたい」と囁くのは斧か

あなたの目の前で なんと瓶は焼け爛れていくのだ  
「こうなるから秘宝なのだ」 天使は再び事務的だ  
「原因はあなたによる炎だ」 すると閉館の時刻だ

ガラス瓶の発する匂いがあなたの記憶を呼び起こす  
木の匂い 生涯の伴侶の匂いだ あなたはまた転ぶ  
落下するあなたの前に次に現れるのは何者だろうか

## 胚

詩を書くことに憧れているのに まだ一度も詩作経験がないあなた  
そんなあなたの体内の奥底で じわじわと育つ受精卵 それが私だ  
あなたと協働して私を作った相手が なぜ詩が書けない？と問うと  
あなたは同じ理由を繰り返す 「嘆くべきことが一つもないから」

なぜ嘆きが必要なのか？と相手がまた問う あなたは能弁に答える  
「深い嘆きがあれば 私の言葉はきっと 記号のままでいることに  
苦悶して沈黙へと向かい始めるはず そして完全なる沈黙がまさに  
訪れようとするその刹那 私の詩はようやく生まれるのだと思う」

あなたの口から洪水のように言葉があふれるのを 振動で感じつつ  
私はまた深い眠りに落ちる 真っ暗な大海原が見えてくる そこに  
一艘の小舟が浮かんでいる 荒波に揺られるその船の真下の海底は  
どこもかしこも 未回収のままの 巨大ミサイルの 化石だらけだ

あなたが私を宿すその前に 二人で旅をした時の写真を あなたの  
相手がまた見ている 外国の少数民族の村落で あなたが木彫りの  
人形を抱いている写真だ 「これを抱いて眠る女は必ず妊娠する」  
と現地で信じられていた人形だ その旅で 私は発生したのだった

眠りから覚め 卵管から子宮へと 内部分裂しながら進み始めると  
私の目前に 廃墟と化した一軒の館が見えてくる 屋根は抜け落ち  
内部は瓦礫の山で 私のような受精卵の姿はおろか 精子や卵子の

姿さえない けれど 残された壁の一つがやけに新品のようなのだ

「私の人生は充実しており 貧困も苦痛も不安も全く抱えておらず  
愛にあふれ 人にも恵まれ 何よりも生きる目的が明確で だから  
私には詩が書けない」 そう言ってあなたが黙ると またも相手が  
問う 君にとって詩とは その目的のための手段でしかないのか？

細胞としての力を限界まで使って 塗り直されているらしき壁面を  
必死に削ってみると 次第にその下から うっすらと 古い文字が  
現れる どうやら誰かへの伝言のようだ 「これまでここで 命を  
終えてきた胚たち同様 私も今ここで命を奪われそうだ 悔しい」

あなたの相手の 落ち着き払ったその声音が この卵管にまで響く  
目的なき手段 目的など超越した真剣な遊戯 無意味を承知の贅沢  
ゲームのためのゲーム それが詩作では？世界を変えるために詩を  
書く必要などない 世界から自らを守る護符 それこそが詩では？

「精子や卵子を集めてミサイルで一挙に殺す その現場がここだ」  
そう訴える壁の文字はもはやほぼ判読困難だ 「私たちがこれ以上  
増えることを 多数派は恐れているのだ 私の生はここで終わるが  
次の胚こそはここを出て人になり 石を投げてでも多数派と闘うか

地上の中心へ向かって 仲間と反旗の行進を起こすはずだ ここで  
今なお起きているのは アパルトヘイトだ アパルトヘイトだ！」  
さらに壁面を削っていくと さっきと違う筆記体の文字群が現れる  
「ここでじっと生存しているだけなんて嫌だ 動ける自由が欲しい

効率よく細胞分裂するだけの生き方に慣れるよりも 信念のために  
殉死する方がまだ 来たる胚たちよ わが死をぜひ敬いたまえ」  
あなたが相手に反駁する声が 遥か彼方から雪のように舞い落ちる  
「そんな詩作だと 私以外の人たちの人生に全く責任が持てないし

死者のことを自分勝手に語るだけの傲慢な詩になりそうで 怖い」  
私の内部分裂が激しさをさらに増していく 廃墟の館を後にすると  
「社会を害悪から防ぐためにあなたができること それは自殺だ」  
という誰かの木霊が卵管を駆け抜けていく 私は再び眠りに落ちる

またも小舟だ ありったけの薬と水と毛布を積んでいる 漂流民だ  
彼らの目的地はどこなのか 彼女らを庇護する者はどこにいるのか  
小舟がいよいよ荒波に吞まれ始めると 漂流民の一人が立ち上がる  
体中のいたるところに素朴な楽器をつけている老人だ シンバルに

ドラム ホーンにタンバリン 両手にはアコーディオンという姿で  
今にも海に落ちそうになりながら 両足を大げさに踏み鳴らしつつ  
「みんな歌え！今こそ歌え！」と叫んでは からからと笑っている  
眼が覚めると 子宮の入口が次第に見えてくる 初めて見る世界だ

「説教はもうたくさん！」と叫んだところで あなたが眼を覚ます  
あなたが抱いていたのは あなたが愛した相手の体ではなく あの  
木彫りの人形だ 少数民族の村落の写真の中で あなたが愛しげに  
抱いている人物こそ あなたの相手だった 「ああ ああ ああ」

あなたの口から漏れ出す声音は　まるで沈黙へと向かうかのようだ  
子宮の内壁への着床を間近に控えた私の内部に　ついに左右の眼の  
先駆けとなる部分が発現する　右眼は　過去の光へと向き　左眼は  
未来の闇へと向いているかのようだ　小舟のように沈みゆく私の体

一方　私の胚たる魂は　四方八方にはじけながら

ゆるやかに上昇を開始する

どこへ向かって？大宇宙へ？

どこへだって構わない　最終目的地を

あれこれ予想したりする余裕など

今の私には　全くないのだから